
恋歌

いくや.forest

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋歌

【Nコード】

N4122K

【作者名】

いくや・forest

【あらすじ】

紫陽花の季節のお話です。

記憶

無感動に無表情に、その内に夜空があるかさえわからなくなってきたら、どうしようもなく眠れない夜が続く。

夜の闇が深くなるにつれて辺りの僕を取り囲む全ての物が見えなくなって、自分の居場所がここだけになるのを感じてから、ゆっくりと目をつぶってみると、すぐに彼女の面影をとらえることができる。

怒っているのか泣いているのか僕には上手く表情を読みとることができない。

彼女はいつも霧の向こう側に立っているのだ。目を細くしてもその面影は夏の日の陽炎のように儚げでなんだか見てはいけない物を見してしまったような、ちょうど友達の告白の場面に偶然にも出くわしてしまったような気恥ずかしく空恐ろしいふわふわとした気持ちが残る。

ふと彼女の後ろに白い紫陽花の花が咲いているのに気づいた。一面に咲く白い花達が彼女が二度と僕の前に姿を表さないのだと声高に叫んでいるような気がして、目を背けたその瞬間に彼女の顔に憂いを帯びた優しい眼差しを感じた。

大人びたその瞳は、いつまでも子供な僕を置いて前だけを見つめていく事を決めたあなたの決意の現れなのか。

「あれもしてあげたかった。これもしてあげたかった。」

1人よがりの僕を見てあなたはまた笑いかけられますか？

紫陽花の花を思い出すのは出会った場所のせいだと思う。

僕の住んでいた町はわらの家に無理やりに石で丈夫そうに見せている、といったら言い過ぎかもしれないが、自然に囲まれたのどかな町だ。夏になれば蛍もいたし、お化け屋敷だつてあつた。どんどんぴや野ウサギとの追いかけっこ。自然は僕にとって友達であり遊び相手だつた。

あの日、小学校6年生だつた僕は名前だけが先走つてしまった団地の中にある3つの公園のうち一番大きな公園へといつても空き地とあまり変わらないのだが。で友達とかくれんぼをしていた。大抵のかくれんぼをした事のある方はご存知だと思うが、あの遊びは途中からどうしても鬼ごっここの要素が加わり始める。かくれた人間を見つけても凄いいスピードで逃げていく鬼にとって不利なものこの上ない遊びなのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4122k/>

恋歌

2010年10月21日22時43分発行